

マタイ 5:43-48 「全き愛の祝福」

「あなたがたも聞いているとおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。しかし、わたしは言うておく。敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな報いがあるのか。徴税人でも、同じことをしているではないか。自分の兄弟にだけ挨拶したところで、どんな優れたことをしたことになるのか。異邦人でさえ、同じことをしているではないか。だから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい」

今日ここで、わたしたちは、完全な者になりなさい、との主イエスキリストからの呼びかけを頂いています。アーメン、そうです、主よ、わたしを完全な者にしてください。そういう単純な応答がすぐに出来ないところが、わたしたちの問題であります。

単純な応答が出来ないというのは、わたしたちが、主イエスキリストのあのお言葉、右の頬を叩かれたら、左の頬を差し出さなさい、とか、上着を取られたら、下着をもくれてやりなさい、とかを、すぐ思い出してしまうからです。

出来ないでありましょう。いや、しかし、外形的に、形式的に、真似事することは出来るかもしれません。すなわち、右の頬を叩かれたら、左の頬を差し出す、上着を取られたら、下着をもくれてやる、そういうことを、かたちの上でだけやってみることは、できないこともない。

しかし、わたしたちが絶対に無理だと思うのは、単にかたちだけでなく、心の内なる思いまでもが、問われているからであります。すなわち、「敵を愛し、迫害する者のために祈れ」という、わたしたちの心の内的な態度が、要求されているのであります。

右の頬を叩かれて、コンチクショー、いまに見てろよ、と思いながら、じっとこらえて左の頬を差し出すことは、やろうと思えば出来ないこともない。上着を取られて、コンチクショー、いつか取り返してやる、と思いながら、じっとこらえて下着をくれてやることは、やろうと思えば出来ないこともない。

ところが、主イエスキリストは無理の無理をわたしたちにお求めになる。心の底から敵を愛し、心の底から祝福を願い祈っておあげなさい、というのです。

この主イエスキリストのお言葉に直面させられるとき、わたしたちは、天国はなんと高いところにあるか、ということをおぼえられます。というのも、わたしたちは、ただ敵を愛し迫害する者のために祈ることが難しいだけでなく、もっと身近な人々、自分の隣人を愛することすら、難しさをおぼえているお互いであるからです。

イギリスの作家 G. K. チェスタートン は、こう申しました。「結婚とは冒険である。戦場に出かけるようなものだから」 この正直な作家は、家庭の生活を平和という言葉で描写するよりも、戦争という言葉で描写するほうが的を得ている、と思うほどに、自分の人生に正直な人でありました。

さて、わたしたちが問題にすべきは、家庭生活におけるわたしたちの心の内的な態度であります。茶碗を投げられたら、コンチキショーと思いながらも、ぐっところえて茶碗を投げ返さない、という形式的な忍耐は、わたしたちはやろうと思えばやれるでありましょう。しかし、茶碗を投げられて、その心が全き愛に満たされ、祝福を願い祈りながら、茶碗を投げ返さない、ということが、わたしたちに出来るでありましょうか？ 主イエスキリストが、こういうたぐいの完全な人を要求しておられるのであるとすれば、わたしたちはただ白旗を挙げて降参するほかありません。

愛を家庭で実践することが、非常に難しいことであるならば、愛を隣人に実践することもまた、非常に難しいことでもあります。G. K. チェスタートン は、こうも申しました。「聖書はわれらに隣人を愛せと言い、また、敵を愛せと言う。理由はおそらく両者がだいたい同じ人々だからであろう」 この正直な作家は、隣人との交わりを良き友、良き仲間、良き同朋という言葉で描写するよりも、敵あるいは敵に近い存在、という言葉で描写するほうが的を得ている、と思うほどに、自分の人生に正直な人でありました。

しかし、もしこの主イエスキリストの法外に思える要求こそが、ほんとうの正しいことであり、無理だ、出来るわけないと思っているわたしたちの今の状態こそが、実は的外れな、間違った状態であるとしたら、どうでしょうか？

わたしたちは、自分の考え方を全部改めなければならないことになります。も

のの見方を全部変えなきゃなん、ということです。

この、ものの見方を全部変えるということについて、先ほどの G.K. チェスタートンは、こういうヒントを与えてくれています。こう申しました。「われらは友をつくる。われらは敵をつくる。しかし神は、われらのとなりにいる隣人をつくりたもう」

いったいぜんたい、筋の通らないへんなことを言ったり、やったりしている人たちというのは、自分ではなく、あの人であり、自分ではなく、この人であり、自分ではなく、ほかの人であります。これが、わたしたちが腹が立つことの、まっとうな理由であり、他者というのは、いつもわたしたちの常識的な理解を外れています。「あんた、おかしいじゃないか！」というわけです。

まさに「わたしの理解を越えた、わたしが理解し得ない、わたしではない存在」というのが、他者であり、他者の他者たるゆえんです。しかし、聖書は、他者を他者とは呼んでおりません。むしろ聖書は、他者のことを「あなたの隣人」と呼ぶのです。そのわけは、神が、その他者を、あなたの隣りに置いてくださったから、ということです。

「われらは友をつくる。われらは敵をつくる。しかし神は、われらのとなりにいる隣人をつくりたもう」という G.K. チェスタートンの言葉は、主イエスキリストの「あなたの隣人を愛しなさい」という言葉と結びつけて考えることによって、わたしたちが世界を見るべき新しいものの見方を提供することになります。

すなわち、わたしの家族、わたしの隣人、わたしの敵、わたしを迫害する人。これらの人たちは、どこからか勝手に現れて、わたしが理解できないことを言ったりやったりしている、というのではない。神が、これらの人たちを、わたしの目の前にお置きになった。その上で、これらの人を愛しなさい、と神がわたしにお求めになっている。それゆえ、もしわたしが神のお召しに従って生きるという生き方を選ぶとするならば、それは当然、神がわたしの目の前にお置きになった、これらの人を愛して生きる、という生き方を選ぶことを意味する。そういうことであります。

そこで、問題は、この目の前にいる理解し難い人たちを、どういう存在としてとらえるのか、ということ。そうして、この目の前にいる理解し難い人たちに、

自分はどのような態度を取るのか、ということ。それを自分で決断しなければならない、という点に絞られてまいります。

主イエスキリストが明らかにわたしたちに求めてらっしゃる「ものの見方」というのがございます。神が、これらの人たちを、あなたの隣りに置いた。そういうふうにものごとを見なさい、という「ものの見方」であります。そうして、主イエスキリストが明らかにわたしたちに求めてらっしゃる「他者への態度」というのがございます。神が、これらの人たちを、あなたの隣りに置いたのだから、あなたがこれらの人たちを心から愛して祝福を祈ることを、神はあなたに期待している、という「他者への態度」であります。

こうして、わたしたちは逃れようもない最後の点に追い詰められて参ります。ジョン・ウェスレーは、このように申しました。「宗教の基本原則のひとつは、機会を逸せず神に仕えることである。しかして、われらは隣人のうちにいます神に仕える」

ここで言われている隣人というのは、おかしいことを言ったり、やったりしない、親切な、やさしい、柔和な、いつでもつきあいたいと思えるような、そういう隣人に限られてはおりません。G. K. チェスタートンが正直に申しましたように、隣人と言うよりは敵と言ったほうがいいのではないかと思われるような隣人が、含まれております。ウェスレーは、隣人を愛することが神を愛することであって、これが宗教の基本原則だ、と述べているのであります。

ウェスレーは、こうも申します。「このことに徹頭徹尾注意したまえ。天の天にあるのは愛だ。愛を超えるものは宗教にない」 わたしたちがいつか天国に行きますと、いったいそこには、愛しかない、とウェスレーは言うのです。わたしたちは、今はこうして、他者への怒り、他者への嫉妬、他者への不満、他者への裁き、他者への腹立ち、他者への正当な意見、というものを抱えて生きております。しかし、わたしたちが天国の門をくぐるときには、それらのひとつも中へ持って入ることが出来ない、というわけです。天国の門の入口のところで、わたしたちは、他者への怒りを全部捨てなければなりません。他者への嫉妬を全部捨てなければなりません。他者への不満を捨てなければなりません。他者への裁きを全部捨てなければなりません。他者への腹立ちを全部捨てなければなりません。他者への正当な意見を全部捨てなければなりません。そうして、天国の門の内側へ持って入ることができるのは、唯一、他者への愛だけなのであります。

そこで、もし天国がそういうところであるとするならば、わたしたちは、今から要らないものはだんだん手放して捨ててしまうべきではないだろうか。どうせ天国に持って入ることが出来ないとかわかっていところのものを、重たい荷物として背負い込んで長々と持ち運ぶ必要はないではないか、ということになってまいります。これは、実に合理的な考え方です。そこで、ウェスレーはこう申します。「わたしはあらゆる物事を、それが永遠の価値を得るかという観点だけで評価する」

目の前にいる隣人を、他者を、敵を、わたしたちは永遠の相に照らして、この人はいない、と捨て去ることが出来るだろうか？ しかし、神がこれらの人たちを、わたしたちの目の前に置かれたのです。神が、これらの人たちを愛しておいでです。神が、天国のわたしたちの永遠の住処に、同じ隣人、同じ他者、同じ敵を、わたしたちの目の前に置かれない、と言うことができるでしょうか？ わたしたちは神をおそれるべきです。

それゆえ、わたしたちがウェスレーの言うように、永遠の相に照らして、手放さなければならない、捨てなければならない、と判断することになるのは、むしろ、わたしたちの心の内にあるところの、他者への腹立ちであります。この他者への腹立ちをこそ、捨て去らなければなりません。

こうして、わたしたちの祈りは、こういう祈りへと導かれてまいります。すなわち、ああ神様、どうかわたしの心の内にある、他者への腹立ちを、取り去ってください。そうして、神様の愛で、わたしの心を満たしてください。これが、全き愛を求める祈りであり、それはまた、全き聖潔を求める祈りであります。

ジョン・ウェスレーは、だれしも、臨終の床では、このようなお祈りをしないわけにはいかない、と申しました。なぜなら、どうしてわたしたちは、他者への腹立ちを抱えたまま、永遠の世界に旅立つことが出来るのでしょうか？ わたしたちは、後生大事に他者への腹立ちを抱えて行くことは出来ないのです。天国に入るためには、どうしてもこの、他者への腹立ちを捨てて行かねばなりません。もし、他者への腹立ちを永遠にかかえて生きていたいと思うならば、その人は地獄に行くほかありません。

臨終の床で、誰しも祈るのです。ああ神様、どうかわたしの心の内にある、他者への腹立ちを、取り去ってください。そうして、神様の愛で、わたしの心を

満たしてください。そうして実際、神様はそのような祈りに応えて、臨終の床で、最後の息を引き取る直前に、そういう祝福、全き愛の祝福、全き聖潔の祝福を、与えてくださるのです。ジョン・ウェスレーは、何度となくそういう臨終の光景を目撃した人でありました。

しかし、とウェスレーは言うのです。しかし、神様のお恵みによって、臨終の床でそういう祝福が与えられるなら、臨終よりもっと前に、そういう祝福が授けられないわけがあるのか？

こうして、わたしたちは、最終的な結論へまいります。すなわち、わたしたちは、そういう祝福、全き愛に心が満たされ、他者への腹立ちから解放される、そういう祝福を、臨終の床において、天国の門に入る直前に欲しいと思うのか。それとも、まだ生きているうちから、今日というこの日に、そういう祝福を欲しいと思うのか、ということです。

もし、そういう祝福、全き愛の祝福を得たいと思うならば、わたしたちは、自己というもの、自分というものを、神様に明け渡さなければなりません。なぜなら、自己にしがみつき、自己に固執するということから、すべての他者への腹立ちというものが、起きて来るのだからです。

わたしたちは、自分を全く神にゆだねる祈りをすることができます。ジョン・ウェスレーは、このような祈りを記しています。明け渡しの祈りです。

「主よ。あなたが与えてくださったものをあなたにお返しするためにみもとに来ました。再び無に等しい者となるために、私は自らそれを手放します。というのは、この天地においてあなたの御前に最も完全な被造物は、ただあなたによって、あなたで満たされ得る空間だからです。大気は真つ暗な空間ですが、太陽の光でまったく満たされるのと同じです。太陽は次の日に再び輝き出るよために、毎日退きます。大気に太陽の光を取り入れるのも、それを遮断するものも、何も存在していません。どうか私にも、あなたの恵みと善い業とを受け取り、またこれをあなたに帰する同じ能力を与えてください。それらはすべてあなたものと言いましょう。それらが生じる根は、あなたのうちにあることを、また私のうちにはないことを、私は遜って認めますから」

これが、自己を神にゆだねる祈りです。世界には神の愛という永遠の太陽の光が輝きわたっています。しかし、わたしたちの心には、自分、自己という、小

さな石ころがはまっています。この自分、自己という小さな石ころが、心の窓をふさいでいるために、神様の愛の光がさえぎられて、わたしたちの心の内は暗くされるのです。しかし、この自分、自己という小さな石ころを、イエス様の御手にゆだねてしまうならば、ふさがれていた心の窓は開かれて、そのとたん、神様の愛の光が注ぎ込まれてきます。わたしたちの心はこうして変えられます。神の愛の光が、わたしたちの心を満たすのです。石が取れ、窓が開けば、心は一瞬で神の愛に満たされます。そこになんの難しいこともありません。こうして、わたしたちは、全き愛の祝福にあずかることができます。わたしたちは今日、どのような祈りを主にささげるのでしょうか。お祈りいたしましょう。

祈り

栄光のキリスト、平和の君よ
あなたの生命を、わたしのうちに、増し加えてください
わたしが生きているのに、わたしではなく
あなたの生命が、現れるようにしてください
人々が、わたしのうちに住まわれる、キリストを見ることができるよう
キリスト、生けるキリストよ
わたしのうちに、お住まいください

わたしの魂の願いに、いま、お応えください
聖なる炎をもって、わたしの心を清めてください
香油を注いで、心の傷を、やさしく癒してください
あなたの不思議な力を、わたしのうちに、吹き込んでください
いまわたしを、満たしてください
キリスト、聖なるキリストよ
わたしのうちに、お住まいください

恵み深い主よ、あなたの恵みを注ぎ
わたしを救い、かつ、聖化してください
わたしの生命のすべてを、あなたにご支配ください
わたしの全存在を、静かに、お治めください
世界が、わたしのうちに住まわれる、キリストを見ることができるよう
キリスト、ただキリストだけが
わたしのうちに、お住まいください
主イエスの御名によって、アーメン